

左から製麺屋「勤記」、骨董屋「勇利行」、卑利街と結志街の角にある露店菓子屋さん、吉士笠街の古いビル内にある焼き豚作りの作業場



①創業 80 年という乾物雑貨店の「永和」。築百年を越える建物は改修して保存されるという ②香港式ミルクティーで有名な喫茶軽食店の「蘭芳園」は開発地区から免れた ③古い標識は、英語が左書きで、漢字が右書き ④旧正月用の飾りが売られる ⑤露店がひしめく嘉咸街 ⑥卑利街の向こうに 88 階建ての The Centre が聳え立つ ⑦昔のビルは入り口の鉄扉に郵便受け ⑧昔ながらの肉屋。手前に野菜や雑貨の露店が並ぶ



「靚女（べつびんさん）、買った、買った！ うまいよ、安いよ！」昔ながらの市場に威勢のいい声が響いている。通りにせり出して並ぶ活きの良い魚や蝦、路上の露店に並ぶ水々しい野菜や美しい南国の果物……。「活きがいい」も、「きれい」も、広東語ではみな「靚」となる。売っている品物が「靚」なら、買いに来る方も「靚」。女性の買い物客なら、多少器量が悪くても、少々歳がいつていても、店の連中がサービストークでそう声をかけられるおかげで、いつも通りは美女だらけだ。高層ビルが林立する香港島の中心、MTR 中環駅の南側を走る皇后大道中をちよつと南側に入った一角にこの市場はある。東西に走る短い結志街と、この通りと直角に交わる卑利街と嘉咸街の界隈は、香港島で最も歴史が古いといわれるにぎやかな商店街である。狭い路地のような通りだが、嘉咸街、卑利街、吉士笠街、土他花利街など、いずれもりっぱな英語の名前が付いている。これらは、香港植民地政府に勤めた高官たちの名前だ。この一帯は、19 世紀、香港を植民地にした英国人が早くに街を築いた場所だった。僻地に送られた官僚たちへの「褒美」が、

今もここにそつと残されている。しかし、建物のほとんどは、その名にあまり似つかわしくない 1950、60 年代に建てられた低層のコンクリートビル。上を見上げれば、変色したコンクリート壁から突き出た看板や、窓からぶら下がった洗濯物が頭上に「陳列」され、その背後に眩しい高層ビルが聳え立つ。次元の全く異なる世界を無理矢理つなぎ合わせたようなこの光景は、まるで映画の一コマのようだ。残念ながら、この不思議な光景も、もう見納めである。昨年、香港政府はにぎやかな卑利街、嘉咸街沿いの建物

再見 下町慕情

香港摩天楼の谷間に
ひっそりと佇む市場が消える

佐保暢子「文」、久米美由紀「写真」

を取り壊し、その跡地にホテルやオフィスビルを建て、新しい商店街を作るといふ再開発計画を発表した。取り壊しが決まると、多くの香港人が、別れを惜しんで、ここにやってくるようになった。昼過ぎに市場へ出かけると、「お役人からは、まだ何の説明もないんだよ」と、私が記者と分かったのか、果物屋のおばさんが、不安そうな表情で話しかけてきた。市場の人たちは、なんだか妙に優しかった。いつも値引き交渉に渋面で応じている骨董屋の頑固お婆さんも、忙しい製麺屋のおかみさんも、路地で半世紀も菓子売ってきた照れ屋のお婆さんも、ビルの奥で豚の丸焼きをせつせと作る職人さんも……みな仕事の手を休め、喜んで写真に納まってくれた。まるで別れの挨拶のように。 ■

